

選者 川口孤舟

投句・選句

伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小早健介

在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫

長谷見びん 福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也

山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

九点 ◎月に舞ふバリの乙女の指撓ふ 昇 (○そ・紀・孤・健・堂・び・○允・啓・盛)

七点 新内仲三郎の会(内幸町ホール)

久々に掛声決める秋天下 紀久男 (○忠・五・敏・雅・正・け・天)

サッチモのだみ声いたく身に入む夜 恵洲 (紀・忠・五・○正・啓・規・亜)

指先の熱きも馳走衣被 堂哉 (紀・○五・千・び・啓・天・盛)

六点 ◎父母の記憶薄れていわし雲 忠彦 (紀・孤・五・た・堂・隆)

秋涼し蹠(あうら)の覗く乳母車 孤舟 (眞・紀・恵・堂・孝・昇)

◎可笑しくてちよつと哀しき秋芝居 五郎太 (○紀・忠・孤・堂・允・天)

◎望の月どこの家にも何かあり 全 (紀・孤・龍・正・允・三)

朝顔や今年も海を見ていない 正明 (眞・紀・健・恵・び・允)

◎長月や捲(めく)れば薄きカレンダー 啓子 (紀・孤・千・雅・正・昇)

五点 水の秋河童は皿を洗ひをり 孤舟 (五・○健・昇・○亜・○三)

汲み置きし盥の月の歪みけり 全 (五・千・た・堂・○啓)

手術後の点滴長し白露の夜 健介 (そ・紀・忠・敏・正)

船宿の裏のいちじく日々熟れぬ びん (紀・ゆ・亜・け・三)

菩提寺へ代参たのむ秋彼岸 盛雄 (眞・紀・忠・た・隆)

四点 コスモスや木曾は何処も水奔る 孤舟 (恵・○堂・び・允)

◎虫の音に癒され眠る夜半かな ゆたか (そ・孤・た・敏)

無人島の砂に色あり曼珠沙華 びん (眞・紀・啓・け)

◎鎮魂のグラウンドゼロや秋夕焼 昇 (紀・孤・健・け)

野辺に咲く飾り気の無き男郎花 全 (紀・た・ゆ・盛)

草の葉に結ぶ朝露箒止め 啓子 (紀・敏・雅・規)

苦瓜の可愛く生りし庭の隅 天牛 (ゆ・び・規・亜)

三点 京芸妓をとこ踊りの群を抜く 紀久男 (そ・亜・盛)

雨の打つ庭先白き曼珠沙華 ゆたか (紀・雅・亜)

◎金木犀別れた人をふと想ふ 忠彦 (紀・孤・千)

遠不二や初冠雪を聞きし朝 五郎太 (紀・千・隆)
 雨上がり屍 (かばね) さらすや秋の蟬 ただしげ (紀・規・け)
 ◎病床の友も愛づるや今日の月 堂哉 (そ・紀・孤)
 秋の蚊に逃げる妻あり老ひの家 雅夫 (紀・○龍・隆)
 晴れ清し朝顔咲けり木の上に 全 (紀・敏・ゆ)
 観客のあつても無くても赤蜻蛉 正明 (紀・規・天)
 鳥帰るヒンズークシュの彼方へと 全 (紀・恵・昇)
 草を喰む牛の足下吾亦紅 啓子 (そ・紀・ゆ)
 明日も晴れそれでうれしき小望月 亜也 (紀・○千・龍)
 さりげなく花野に捨てし隠しごと 盛雄 (紀・孝・昇)

二点

◎救急のサイレン絶えぬ秋の夜 そらお (孤・隆)
 汗ばめるシャツを通して秋の風 全 (紀・龍)
 籠り居に紅葉の湯宿の誘ひ来る 紀久男 (健・盛)
 落葉流れ色様々に我が人生 忠彦 (紀・ゆ)
 敬ふは嬉しき言葉老人の日 全 (紀・三)
 秋湿りも一度試すパスワード 五郎太 (紀・び)
 籠り居はもはや日常秋二度目 千恵 (紀・た)
 玉虫厨子みて上野は秋夕焼 全 (紀・け)
 薄色の羽織や三冠菊薫る 全 (孝・規)
 怠け癖倣ひとなりて夏果つる 恵洲 (紀・天)
 手拵げて仲秋の月光満身に 全 (孝・盛)
 音に聞く根岸を巡る子規忌かな 堂哉 (紀・健)
 鰯雲わが来し方は幻に ゆたか (紀・○孝)
 茗荷の子久しぶり晴顔出せり 雅夫 (紀・隆)
 早よにげや背に蠟螂のうすみどり びん (紀・三)
 ◎七十代は未だ序の口と敬老日 昇 (紀・孤)
 俯いて歩く鼻腔に金木犀 啓子 (紀・恵)
 南から届く新米草香載せ 全 (紀・龍)
 吉吉と鳴いてきちきち跳びにけり 規雄 (紀・○昇)
 相手無き空手の型や秋の立つ けい子 (紀・忠)
 まだ七十若いと言われ秋句会 全 (眞・紀)
 大ルーペ分類を終へ夏果てる 天牛 (紀・○恵)
 縄文から競いし栗や熊と人 盛雄 (紀・龍)
 爽籟やムーランルージュ再開す 全 (紀・正)

一点

仁左衛門・玉三郎の「四谷怪談」 (○敏)
 冷 (すき) まじき殺し場端折る芝居小屋 紀久男 (○敏)
 NHK TV 旅芝居の全国座長大会 (福岡県飯塚市)
 万札のおひねり溢る村芝居 全 (天)
 山葡萄液一升瓶で野生の香 忠彦 (紀)
 時間かけ名を読み上げる9月11日 五郎太 (紀)

ラケットに停まつておくれ赤とんぼ
耳元で蚊の声賑やか草むしり
雨上がり晴れたる空に赤とんぼ
青年あり秋爽に適ふその笑顔
秋うららポチの名似合う雑種犬
庭荒び空き家と知らる罫雲
シャンプーの仄かに香る祭笛
テレビ見つ居眠る癖や秋ともし
蟬がらに頼らる庭に合掌す
コロナ禍も災害のうち防災日
さやさやと風に吹かれて秋桜
秋晴れや行列延びる人気店
アララギの実は食し得て種に毒
破れ垣を繕ふ主人秋麗ら
月見豆波音聞きて能登の海
土砂流る珠ゆらゆらと吾亦紅
梨届く昔まるごと齧りしに
ミントバジルみな懇ろに水をやる
万葉の夢ここに秋の七草

健介 (紀)
ただしげ (雅)
全 (○敏)
惠洲 (三)
堂哉 (雅)
全 (孝)
ゆたか (紀)
雅夫 (紀)
昇 (紀)
規雄 (紀)
亜也 (紀)
全 (紀)
全 (紀)
けい子 (紀)
全 (紀)
天牛 (紀)
全 (紀)
盛雄 (紀)

【句評】

九点句

月に舞ふバリの乙女の指撓ふ

昇

孤舟さん・・・月光を浴びて表情豊かなバリ舞踊の乙女。

堂哉さん・・・ケチャックダンスなど懐かしく思い出しました。夕闇がせまったら、

満天に星がすき間なしに輝いていました。

允章さん・・・民族衣装を着たバリの乙女の舞姿を思い出しました。

盛雄さん・・・厳しく辛い話題の多い世相、うれしい夢の佳句。

七点句

新内仲三郎の会(内幸町ホール)

久々に掛声決める秋天下

紀久男

忠彦さん・・・掛声と秋天下がピッタリ合います。私も掛声聞きたいので天にしみました。

五郎太さん・・・「秋天下」、気持ちいいですね。

けい子さん・・・暗い日々、久々の掛声明るい気持ちになります。もっと気楽に掛けられる日々が来ると良いですね。

紀久男・・・河東節仲間の小島康敬さん(名古屋の釉薬メーカー会長・中部地区経済同友会副代表)からのご招待。小島さんは鶴岡元専務のお仲間でもあります。腕を上げておられ掛声も嵌りました。楽屋で瀬戸窯22代目の絵皿を戴きました。

サツチモのだみ声いたく身に入む夜 恵洲

忠彦さん・・・若い人の唄が多い今、ふとジャズの歌を聴きたくなります。同感！

正明さん・・・哀愁と言えばこの人の歌声でしょう。

亜也さん・・・読んでいてあの声が耳に響きました。

指先の熱きも馳走衣被 堂哉

五郎太さん・・・アチチ。塩を少し振って、冷酒で。

盛雄さん・・・「熱きも馳走」が素晴らしい表現です。〃今生の今が幸せ衣被〃（鈴木

真砂女）を連想させてくれました。

六点句 父母の記憶薄れていわし雲

忠彦

孤舟さん・・・父母と別れて随分長い年月が経ってしまった。

ただしげさん・・・なんとなく寂しい気持ち伝わってくる。

堂哉さん・・・老夫婦の長閑な秋の昼下がり。

隆さん・・・記憶の薄れそうな不安を「父母のこと薄れゆくいわし雲」。

秋涼し瞭（あうら）の覗く乳母車 孤舟

恵洲さん・・・愛らしい一句。嫌味なく、好感が持てる

堂哉さん・・・パッチリ目は開いているのかな？すやすやかな？乳母車を見ると覗きたく
くなります。

可笑しくてちよつと哀しき秋芝居 五郎太

孤舟さん・・・不慣れな所作乍ら、演者の喜怒哀楽が伝わる。

忠彦さん・・・芝居は笑いと涙ですね。三日月の朝の「おちよやん」のように・・・

堂哉さん・・・芝居見物は何時になったら出来るかな？

紀久男・・・芝翫・勘九郎の田舎の仲の良い婆さん役「お江戸みやげ」がほろつとき
せます。リハビリ中の福助が一寸歩けるようになりほっとしました。

望の月どこの家にも何かあり 五郎太

孤舟さん・・・全て円満で何の問題もない家庭は珍しいだろう。

正明さん・・・どの家も何かしら問題を抱えていますね。

朝顔や今年も海を見ていない 正明

恵洲さん・・・コロナ禍で籠り居の無聊を託っている感じが、あえて口語で詠んだと

ころに、よく感じられる。

長月や捲（めく）れば薄きカレンダー 啓子

孤舟さん・・・今年ももう残り僅かとなった。

五点句 水の秋河童は皿を洗ひをり

孤舟

五郎太さん・・・面白い句です、カップの像が近くにあるのでしょうか。

健介さん・・・私は若き日に河童とあだ名されたことがあり、河童に執着があります。
ただし、河童は夏に出るものと思ひ込んでおり、恥ずかしながら、

「淀みより河童の出を待つ五月かな」なる駄句を詠んだことがあります。
亜也さん・・・さも見てきたようで人を食ったところが好きです。

汲み置きし盥の月の歪みけり

孤舟

千恵さん・・・下にある月を愛でるのも一興ですね。
ただしげさん・・・名月を盥の中へ取り込もうとしたが月の形にならず、残念な気持ち、理解できる。

堂哉さん・・・着眼点が面白い。月の揺れが見えます。

手術後の点滴長し白露の夜

健介

忠彦さん・・・次女が最近手術をしましたので、実感。

船宿の裏のいちじく日々熟れぬ

びん

亜也さん・・・そういえば無花果は表には余り植えてないような…。

菩提寺へ代参頼む秋彼岸

盛雄

忠彦さん・・・故郷が遠いので「故郷や遠きにありて拝むもの」
ただしげさん・・・コロナ禍の時期、近くの人に代参を頼む気持ち理解できてよい。
隆さん・・・「代参」が聞きなれない。「秋彼岸代わりに参拝頼みけり」で如何。

四点句

コスモスや木曾は何処も水奔る

孤舟

恵洲さん・・・島崎藤村の夜明け前の書き出しを思い出させます。清冽な水の音と
コスモスの揺れる木曾路に臨場感があります。

堂哉さん・・・景色がワーツと目に浮かんできました。青い空、白い雲、紅葉間近の
山の景色、そして清流の水音。直ぐにも旅立ちたい気分です。

虫の音に癒され眠る夜半かな

ゆたか

孤舟さん・・・虫の音を睡眠薬としてようやく寝付くことが出来た。

ただしげさん・・・秋の虫の声を聴くと、ほっとして眠りに誘われる感じが出ている。

鎮魂のグラウンドゼロや秋夕焼

昇

孤舟さん・・・あの悪夢のような光景が蘇る。

野辺に咲く飾り気の無き男郎花

昇

ゆたかさん・・・情趣のある女郎花に比べるといささか無骨ですが、男らしいかも。

盛雄さん・・・中七の「飾り気の無き」表現が秀逸。季語が生きています。

苦瓜の可愛く生りし庭の隅

天牛

ゆたかさん・・・「可愛く生りし」の措辞がいいです。

三点句

京芸妓をとこ踊りの群を抜く

紀久男

盛雄さん・・・初秋のNEKTVで京都花街の美人芸妓の華麗な舞をみせてくれました。
まさに夢は夜ひらくです。嬉しい一句。

紀久男・・・昭和50年代の京都支店（京都丸紅）を思い出しました。一月は祇園
の芸舞妓が始終出入りして華やかな雰囲気。受付のおばさん等のもて
なしは最高！支店長代理の伊部さん、小山さんにはお茶屋で遊ばせて
貰いました。黛まどかが日経夕刊のコラム「あすへの話題」に芸妓引
退後にスナックを開き九十歳まで店に立ち続けた「米（よね）さん」
のことを書いていました。同じスナックかどうか分かりませんがカウ
ンター越しに灯籠のある石庭を眺められるようにしてありました。パ
トロンあつてのことでしょう。

雨の打つ庭先白き曼珠沙華

ゆたか

亜也さん・・・「白き」が効いています。

金木犀別れた人をふと想ふ

忠彦

孤舟さん・・・あの人と別れた夜も、金木犀の芳香が漂っていた。

千恵さん・・・人の思い出がある特定の匂いと結びつく事ってありますね。

病床の友も愛づるや今日の月

堂哉

孤舟さん・・・澄み渡る夜空に輝く清澄な満月を、場所は違えど同時に仰ぐことで、病床の友との絆が更に深まる。

秋の蚊に逃げる妻あり老ひの家

雅夫

龍平さん・・・「心が広く健康な人の血液は蚊が美味しくないと感じるので蚊は吸いません」と我。「どういうことですか?」と妻。意見違いも数多ありましたがそろそろダイアモンド婚とは。

隆さん・・・「秋の蚊や老ひたる妻は逃げにけり」で如何。

晴れ清し朝顔咲けり木の上に

雅夫

ゆたかさん・・・木の上に楚々と咲いた朝顔が目には浮かびます

鳥帰るヒンズークシュの彼方へと

正明

恵洲さん・・・Hindu Kush は、パミール高原から南西に走り、アフガニスタンの脊梁をなす山脈とのこと。本当にそんなに遠くまで帰るのかどうか知らないが、スケールの大きい句であることは間違いない。

草を喰む牛の足下吾亦紅

啓子

ゆたかさん・・・牛と吾亦紅の取り合わせが絶妙です

明日も晴れそれでうれしき小望月

亜也

千恵さん・・・明日の満月を心待ちにしている心情にささやかな幸せ感が伝わります。

二点句

救急のサイレン絶えぬ秋の夜

そらお

孤舟さん・・・コロナ患者の収容先の病院探しに手間取っている。

隆さん・・・コロナ感染爆発で夜はよくサイレンが鳴りました。後年でも分かるように「サイレンはコロナ患者か秋の夜」で如何。

汗ばめるシャツを通して秋の風

そらお

龍平さん・・・早朝散歩でもなお扇子を持参しての秋です。

籠り居に紅葉の湯宿の誘ひ来る

紀久男

盛雄さん・・・湯宿からの案内、うれしいでしょう。コロナ感染は沈静化の傾向。羽を伸ばして英気を養ってください。

落葉流れ色様々に我が人生

忠彦

ゆたかさん・・・同感です

籠り居はもはや日常秋二度目

千恵

ただしげさん・・・二度目の秋も、籠り居で気分が減入る。

縹雲わが来し方は幻に

ゆたか

孝さん・・・縹雲にのせた万感の思いの消えていく様が面白い

茗荷の子久しぶり晴顔出せり

雅夫

隆さん・・・今年は日照不足。貴重な話題ですね。

七十代は未だ序の口と敬老日

昇

孤舟さん・・・とすれば、横綱になれるのは百何十歳代？

俯いて歩く鼻腔に金木犀

啓子

恵洲さん・・・俯いて歩いていたら、ふと、金木犀の芳香が鼻腔に届いて、思わず目を上げた感じ。金木犀ならさもありなん。

南から届く新米草香載せ

啓子

龍平さん・・・漸くフレッツシユな五穀豊穡到来の秋。コロナ禍もご退場願いたく。

吉吉と鳴いてきちきち跳びにけり

規雄

昇さん・・・吉吉とはシャレの効いた縁起の良い句ですね。コロナ感染も下降気味で収束に期待。さて？

相手無き空手の型や秋の立つ

けい子

忠彦さん・・・空手を俳句の題材にするのが面白い。俳句と空手に「削り取った技」何か共通点を感じます。

大ルーペ分類を終へ夏果てる

天牛

恵洲さん・・・植物分類か何か、かなり厄介な仕事に夏中励んでいて、夏の終わりと共に成し遂げた感じと思われる。一仕事終えた安ど感に夏果てるの季語が良くマッチする。

一点句

仁左衛門・玉三郎の「四谷怪談」

冷(すさ) まじき殺し場端折る芝居小屋

紀久男

敏郎さん・・・仁左・玉の演じる殺し場を端折るのもまた美学なのでしょうね。

雨上がり晴れたる空に赤とんぼ

ただしげ

敏郎さん・・・少年時代への郷愁(ノスタルジー)を感じさせます。

秋うららポチの名似合う雑種犬

恵洲

眞希子さん・・・私もかつて捨て犬を二匹飼った。どちらも雑種であることは明らか。何種の混血か？血統云々などにはまったく無関係だが瞳は澄み、人懐っこかった。ペットと呼ぶには似合わない。でも家族だった。昭和の終わりから平成初めの頃の私の家族の原風景。



次回青葉会

令和三年十月二十八日 (木) 十二時半〜都立大学駅前 会食料理「ひのや」

ひのや 所在地：東京都目黒区平町1-25-14 ☎050-5595-1160 東急東横線、都立大学駅、徒歩2分

※東横線都立大学駅の改札口はひとつです。改札を出て目の前の横断歩道を渡りすぐ右に、すぐに見えるみずほ銀行を左手に見てそのまま直進、道路沿い「大衆酒場はんろく」の二軒程先にあります。恵洲さんに労をとっていただきました。ランチ2,800円(税別)個室代金3,000円(出席者で分担)会席料理ですが、レストラン形式の椅子席の部屋をお取りいただいております。

◇句会参加の可否を21日(木)までにお知らせください。

◇参加者は当季雑詠5句。投句は3句まで。締め切りは十月二十六日(火)中です。

参加の可否、ご投句のご連絡は：

今井宛 FAX か郵送、或いは星田メール(keiko-reve@c07.itscm.net)へお送りください。

一、猛威を奮った新型コロナ感染者数はワクチン接種者の増加に伴い九月に入り著しく減少し、緊急事態宣言は九月末から段階的に解除されつつあります。皆さまにはホッとしておられることと存じます。今回のweb句会は21名のご参加、投句33句。「覧の通り 昇さん、恵洲さん、堂哉さん、紀久男が好成績でした。」

二、関係者近詠

荒梅雨や仕事流れて昼の風呂	眞希子	昼寝覚いま見た恋はいつの恋	陽亮
青田風少子に喘ぐや小学校	全	落蟬の命乞ふ瞳を見てしまふ	全
待たせしを詫びては介護暑き日々	全	独り居を旧知の夜蜘蛛覗きに來	全
だれかれと持ち寄る団扇ロッカー室	全	天井をジュラ紀の守宮這ふ夜かな	全
短夜やセレーネ馬を駈りに駈り	弘子	白鳳・芝翫の「身替り座禪」	
遅れては父追ふ少女額の花	全	荒梅雨やひどい演技に憤る	紀久男
初冠(うひかむり)のレース祖父似のみどり児へ	全	(本来コミカルな狂言だが二人共大声で怒鳴るだけ。誰も笑わない。今年最悪、金返せ!と云い	
シュート一本決めて山の子雲の峰	全	たくなった。ただしげさんと見物)	
		喪の家に離れがたきや揚羽舞ふ	全
		薔薇垣のパン屋に列ぶ巴里の朝	全

「森の座」(横澤放川選)10月号

空き室のなき病棟や居待ち月	盛雄	ビル街の花野に幕張る野点かな	紀久男
名も知らぬ野草に出会ふ花野かな	全	きちきちの不器用に飛ぶ散歩道	全
大阪に琉球の村蔓荔枝	全	酒さかなすべて地元の村祭	全
寝転べば空果てしなき大花野	健介	野次とばしおひねりの飛ぶ村芝居	全
村祭名物男帰郷せず	全		
この旨さ苦手ゴーヤを妻工夫	全		

「きさらぎ句会」9月

断捨離は虚しきことよ竹落葉 盛雄 若森京子 選

蛇穴に吾は久しく籠りけり	允章
白桃を剥く静かなる午后なりし	全
秋茜日毎に空の藍深かめ	全

三、孤舟選者近詠

立つ泡の何を呟く水中花	燕帰る期限の切れし旅券持ち
魚偏の文字幾つあり鱗干す	風あれば風に従ふ秋桜
円空の作やも知れぬ自然薯掘る	

四、「文人俳句歳時記」(生活文化社 昭和五年十月発行 ¥800円)より相撲も入れて小生好みの秋の句を抄出してみました。

秋場所の秋は名のみの人いきれ	(北條 誠)	インキ壺紺青湛へ灯に親し	(吉屋信子)
生きてあることのうれしき新酒哉	(吉井 勇)	思ひ見る湖底の村の秋の燈を	(佐藤春夫)
濁り酒提げて行く夜の土橋かな	(玉川 一郎)	いささかのかびの匂ひや秋袷	(森田たま)
掛稲や渋柿たるる門構	(夏目漱石)	稲妻や世をすねて住む竹の奥	(永井荷風)
秋風やひびの入りたる胃の袋	(夏目漱石)	たぶたぶと浜菅こゆる葉月汐	(折口信夫)
秋風や售(う)れぬ詩人のいかり肩	(幸田露伴)	佛やつくばひ覗くあきの水	(森 鷗外)
境内や草の中なる相撲風呂	(佐藤紅緑)	初汐や白魚跳ねて舟に入る	(寺田寅彦)
		墓地茶屋の渋茶はぬるし秋彼岸	(徳川夢声)

五、「三方よし」

先進国で近年唯一所得の増えていない日本のトップが代わり岸田新首相の所信表明は経済成長と分配の重視です。近江商人の経営哲学「三方よし」にも言及。伊藤忠兵衛さん以来の商いの伝統です。「売り手よし 買い手よし 世間よし」を踏まえ「株主だけでなく、従業員も取引先も恩恵を受けられる『三方よし』の経営を行うこと」が重要と説いていました。

令和三年十月八日

紀久男 記